



秋から冬へ

もぎ のりえ
茂木 規江

アダム・ミツキエヴィチ大学・講師

ポーランドではカチンスキ兄弟が政権を握って
から、11月12日の統一地方選挙を意識してか、汚
職・賄賂・盗聴・選挙違反などの政治家の醜聞
が、連日マスコミに取り上げられています。そし
て巷でも、いじめや子どもの自殺のような今まで
になかった問題や、減らぬ飲酒運転などの暗い話
題が続いている毎日です。

そんな中で最近行なわれたヘンリク・ヴィエ
ニャフスキ国際バイオリン・コンクールにおい
て、ポーランド人大学生アガタ・シムチェフスカ
氏が1位になったことは、久し振りに明るい
ニュースでした。今年で13回目を迎えたこのコン
クールは、10月14日から28日までポズナンで開催
されました。普段文化的行事に乏しいポズナン市
民が誇りにし、また、楽しみにしているこの国際
大会は、19世紀を代表するバイオリニストの1人
と称されるヘンリク・ヴィエニャフスキの名に由
来しています。1835年にポーランドで生まれた
ヴィエニャフスキは、ピアノのショパンと同様に、
ポーランド人には馴染み深い音楽家です。彼の名
を冠したヴィエニャフスキ・コンクールは、1935
年にワルシャワで開催された初回を除き、1952年
の第2回目以降はポズナンへ場所を移し、以後5
年に1度開かれ現在に至ります。若手バイオリニ
ストの登竜門といわれるこのコンクールには、今
年も世界各国から、事前審査で選ばれた32人の若

手演奏者が、腕を競い合うべく集まって来ました。
彼らの演奏の様子はコンクール開催中、テレビや
ラジオやインターネットを通じて放送され、多く
の人達を楽しませてくれました。

オーケストラと共演となる最終審査に残った8
人の内訳は、日本人が1人、ロシア人が2人、残
りの5人は全員ポーランド人で、そのうちの3人
が地元の音楽大学の学生でした。このため、外国
人が少ないとの指摘もかなりありました。今回外
国人として最高の2位になった17歳の鈴木愛理氏
の演奏は、決勝前から「1位は彼女か？」とも噂
されていたほどの高い評判を得ていました。28日
の最終発表を待つ間にも、コンクールを聴きに来
ていたポーランド人からも賛美の声が聞かれてい
たほどです。オーケストラとの共演が初めてだっ
たということを考えると、2位になった彼女の技
量は高く評価されるべきでしょう。

さて、コンクールの余韻を楽しんでいる間もな
く、中央ヨーロッパの「夏時間」が終わり、同時
に今年も冬の到来となりました。この「夏時間」が終
わる10月の最終日曜日だけは、1時間余計に睡眠が
とれることもあり、不満を漏らす人はまずいません。
ただ、特に年配者からは、「体内時計の調整に時間
がかかるので、好ましくない」という意見もありま
す。夏時間の終了は、毎日憂鬱な気分で灰色の空を
見上げ、日中の時間が短くなっていくのを感じなが



ら、「太陽」を待ち望む日の始まりでもあります。特に今年の秋は、穏やかで暖かったこともあり、森で散歩がてらの茸狩りや、山歩き等、「ポーランドの黄金の秋」を満喫できたため、「冬」の到来は恨めしいことでした。

こうして冬の訪れと共に迎えた11月1日は、カトリックの祭日にあたる「万聖節(諸聖人の日)」、2日は「死者の日」でした。日本のお盆に相当するこの両日には、「亡くなった人達のことを思い出し、祈りをささげよう」という意味合いがあります。10月31日及び11月1日の両日は国営放送でも、前ローマ法王や、今年亡くなった著名人の思い出が語られました。この祭日前後は、普段は空いている電車やバスが、帰省ラッシュのため乗車率100%を超え、長距離バスは乗車券を買うことも困難になるほどです。その反動で、大都市では一時的に人口が減り、都市中心部の交通量は激減し、街は静かになります。市中心部から外れた所に位置する墓地へは、市内公共交通機関を利用して行くことができます。このため公共交通機関は、墓地のある方向へ行く便を、この祭日の2～3日前から増発したり、臨時便を走らせたりと、墓参りする人達への便宜をはかり、渋滞を緩和させようとしています。それでも墓地周辺では交通渋滞は避けられず、駐車場を見つけるのも困難といった所もあるようです。またこの時期は、毎年スピード

違反や飲酒運転も増えるため、警察が特別警戒をし、ニュースなどでも運転手に注意を促します。

ところで、ポーランドのお盆が日本のそれと大きく異なる点は、親族や知り合いの墓参りをするだけではなく、戦争などで名も分からず葬られている人達や、国籍を問わず、無縁仏となってしまった墓にも、火をともした色とりどりの蠟燭や花を供えることです。これらは、旧社会主義時代から行なわれてきたことで、教会離れがささやかれている今でも、大切に守られている習慣です。この背景には、宗教以外にも、度重なる戦争や動乱等の歴史や、そういった国に生を受けたポーランド人としての自覚が挙げられます。もちろん、少数ながらも、習慣を軽視する若い人達が現れ始めていることも確かですし、「家族をがっかりさせたくないから、行きたくないけど墓参りする」という人達もいます。後者の意見には、「家族」を重要視するポーランド人の一面が象徴されている気がします。

万聖節の日没に墓地へ行くと、真っ暗な中に無数の蠟燭の明かりが美しく、厳かな気分させられます。そして、ポズナンは本格的な冬を迎えます。